

母親の病氣は、一層劇烈であつた、二日ほどで危篤となつた。隣合つた室に、母と子が、病に苦んでゐる。母は子を呼び、子は母を慕ひ求むる様は、實に――悲惨で目もあてられぬ様だつたこのこと、あゝ遂に――母は我が子を殘して永眠した。子供も、一日おいて、母の後を追うた。子は母の死を知らず、母は子の死を見ずに、永く眠に就いてしまつた。定めしよみちにいつて、再び手を取り合つて長い――旅路をゆくことであらう。運命の神様は此親子のものに對してつれなかつたのであらうか。又は、すくはれたのであらうか。神でない限りはわからぬのである。「神様よねがはくば此のあはれ縁深き母と子を、安けき道に導かせ給ひ、永久に――愛でいつくしみ給へ」と祈らずには居られなかつた。

○感激の一しづく

實習科卒業生 え い 子

|| 宮中拜觀の榮を擔ひて ||

師の君より、宮中拜觀の光榮に浴すべければとの仰せ承りてより、たゞ心おどり、もう一日よ、二日よと、おまなこの正月待つ心地にもまして、待ちわびぬ。白襟に紋付よなど、より――にしひやかに語らふも女らしくもやさしくおさへきれぬ喜びのあふれとも覺ゆ。

三月二十五日。あゝこの世にあらん限りの思ひとなりしこの日。朝の程よりあやしき空のやがて降り出したるは口惜し。本校、實習科、専攻科、委託生の順にならびて、うれしさにさわきたかまる胸おしづめて校門を出ては八時十分。九時過ぐる頃御所につきぬ。

しはぶきの聲一つさえたてず、たゞサクリ――と靴の音のみ耳たちて、これなかりせばと思はるゝ迄の静けさ。呼吸くるしさに我にかへれば、何時のほどよいか息をもつかずにおそれかしこみて歩きしにて、之を幾度か繰返しつ。

玉座の御邊り拜し奉りては、たゞ――身のわな――を覺えつ。やんごとなき御方様の、あの内苑門の御内こそ常の御まじどころと承りてはたゞ頭さがりてはるかに拜しあげつ。

玉芽の道如何にたどりしや、つゆ知らぬまに紅葉山に身ははこばれぬ。

しるしつらぬるにはあまりに壯嚴なりしよ。たゞ――、何らやらも遠き日の夢ごとの程にて、うれしきは胸にたゞよひ夢の中に夢見る心地すれど、この光榮はげに夢にはあらざりし。

ときはなる松の緑のいやふかく

君を千歳と田鶴のまふなる